

野菜需給協議会現地協議会意見交換会の概要

- 1 日時：平成25年2月14日（木） 10:40～11:40
- 2 場所：JA岩井野菜予冷センター会議室（茨城県坂東市）



3 議事概要

(1) 全農茨城県本部から、茨城県の野菜生産について、以下のとおり説明があった。

- ・ JA全農では主に三つの事業を実施している。農畜産物を市場や消費者に販売する販売事業、出荷に必要な段ボール、生産に必要な肥料や農薬等を生産者に供給する購買事業、食の安全・安心及び担い手支援等について関係機関と連携しながら実施している営農指導事業がある。
- ・ JAグループ茨城の農畜産物には、「惚れ²（ほれぼれ）」のマークを入れて販売しており、マークを集めて応募すると県内産の農産物が当たるというキャンペーンも実施している。
- ・ また、生産者と消費者の架け橋になろうと、十数年前からポケットファーム事業を実施し、直売店を2店運営している。牛久店については午後から視察頂く予定。
- ・ 全農茨城県本部の園芸事業の特徴的なものとしてVFステーション（選果選別・包装、および実需者への直販を専門的に行う集出荷施設。VEGETABLE&FRUITSステーションの略）がある。県内には3か所あり、十数年前から業務関係を中心に直販事業を実施している。
- ・ 全農茨城県本部全体の販売事業の取扱高は、平成24年度は1,115億円を計画しているが、このうち、青果物販売となる園芸事業の販売事業は857億円で、全体の7割を占めている。
- ・ 茨城県内の農家件数、耕地面積は、全国と同様に減少傾向。
- ・ 東京都中央卸売市場における茨城県産青果物取扱高は、平成23年で

458億円、平成24年で478億円と、9年連続でシェアが全国一となった。

- ・ 茨城県内は、県北地区、鹿行地区、県南地区、県西地区に分かれて農産物が生産され、収穫量が全国一となっている品目は、れんこん、はくさい、チンゲンサイ、メロン、ピーマン、くり、カリフラワーがある。また、加工品では干芋生産の9割が茨城県産と言われており、様々な品種のものが生産されている。

(2) 次に、JA岩井から、JA岩井管内における野菜生産について、以下のとおり説明があった。

- ・ 昨年、夏ねぎのポスターを作成し、消費宣伝や量販店での試食販売等で使用したが、岩井管内のねぎの主力は夏ねぎで、年間出荷量170万ケースのうち、8割を占める。
- ・ 平成17年に岩井市と猿島町が合併して坂東市ができた際に、引き続き単協として活動する選択をし、名称はJA岩井市からJA岩井に改めて今日に至っている。
- ・ 元々は、米、麦、たばこ、お茶、こんにやくといった農産物で農業経営を実施してきたが、昭和33年に利根川に芽吹大橋が開通し、東京への交通の便が良くなったことを機に、野菜を栽培する農家が増加しはじめた。最初はトマト、その後ははくさい、レタスと食の洋風化に伴い、商品価値の高いものが栽培されてきた。ねぎは元々生産されていたが、これも生産面積がどんどん増加してきた。
- ・ 春にレタスやリーフレタス、5月から初秋まで夏ねぎ、その後秋レタスというのが主な作付体型となっている。
- ・ 2月～1月末が農協の事業年度となっているが、平成24年度の青果物の販売実績はレタス類で年間36.9億円、ねぎで25.7億円、その他で5.5億円となっており、レタス類とねぎで全体の9割を占めている。レタスは北海道から大阪まで広域に出荷しているが、ねぎはほとんどを首都圏へ出荷しており、平成24年度は築地市場、太田市場でそれぞれ約5億円販売している。
- ・ ねぎの栽培面積は平成25年度で約300haを見込んでおり、30億円の販売を目指したい。
- ・ JA岩井の組合員数は約4千4百人で、うち野菜部門の岩井農協園芸部には、485人の組合員が所属している。
- ・ 野菜の流通・販売は管内2か所にある野菜予冷センターで行っている。主にここ第一予冷センターで数量管理、市場への出荷、検査等を実施している。また、第一予冷センターでは50名程度を雇用して、生産者の

手伝いやねぎの結束、袋詰め作業等を実施している。

- ・ 夏ねぎのはじまりは、昭和30年に長須地区松の台の有志の方が、千住系黒柄の黒昇一本太葱と称されたねぎを埼玉県吉川町から導入して作り始めたのが、原点と言われている。また、荷姿については、以前はポリテープによる4kg結束で出荷をしていたものを、輸送効率を考慮して、昭和47年に全国で初めて5kg詰めの段ボールに切替えた。

- ・ 数年に一度季節はずれの台風や長雨で大きく出荷量が減少し、その結果、価格が高騰するときもあれば、出荷量が前年より大きく増加して価格が暴落するときもある。

再生産可能な目標額は1ケース当たり1,500円であるが、なかなか達成するのが厳しいことが多かった。特に平成12年には、ねぎの最盛期に「ひょう」が降って出荷が激減したが、報道がなされたこと等から、加工業者を始めとして輸入ものの需要が増加し、輸入が大幅に増えたため、通常は価格が高騰するところが、逆に前年よりも安い価格となってしまった。

その後平成13年にはセーフガードが発動され、なんとか落ち着いたが、セーフガード発動条件として産地の構造改革が求められ、コストダウン、高付加価値商品の開発や、契約取引の推進により定量・一定価格の出荷を進めることで生産量を増加させてきた。

- ・ 産地の構造改革については、機械化・省力化を行ってきたが、レタスよりねぎのほうが機械化しやすく、播種や苗の移植についても一部機械化し、防除作業についても昔はすべて背負いのポンプでやっていたが、乗用のものが導入された。また、根深ねぎなので30~40センチ掘る収穫作業が一番大変だが、平成9年に農水省の補助事業を活用して収穫機を導入した。その後機械化を進めて、現在、全国で導入されている約500台のうち半分の約250台がJA岩井管内で稼働している。導入当初は一台約250万円だったものが、今は約350万円となっており、多少経費はかかるが、県のリース事業等も活用しながら導入している。その他、皮むき、根切り、葉切りといった処理を行う調整機を導入しており、現在約70台となっている。

- ・ 集出荷の流れは、朝8時30分から生産者がセンターに持ち込み、それを等級毎に仕分けし、予冷施設で5℃まで下げて、冷やしたものをその日のうちに消費地、市場に出荷する。

- ・ 流通経費削減の取組みとして、市場ではなく直接、量販店の流通センターに運搬し、流通ルートを省力化することも一部行っている。また、試験的に量販店向けにイフココンテナ（通い容器）を導入し、段ボール

等ゴミの削減にも取り組んでいるが、段ボールを使用する場合よりコストが高いため試験の域を越えていない。

- ・ また、出荷量の多い6月から7月までの出荷分のうち、量販店・加工業者向け等の一部については、4月の段階で市場関係者、全農、生産者組織等と協議してあらかじめ価格、出荷先、出荷先別出荷量を決めた取引をして、取引先への数量確保、生産者の収入安定につながるよう努力している。
- ・ 商品の高品質化への取組みとしては、減化学肥料・減農薬栽培をしている農家は全体の1割に当たる40名弱で行われており、「野菜名人グループ」という名前でブランド化し、産地化に取り組んでいる。若干コスト増となる分、価格に上乘せしたいが、なかなかそうもいかず、またそこまでの取組みをしなくてもよいと考える生産者もあり、現状の規模に留まっている。

(3) 続けて、生産者から、最近の生育・出荷状況について、以下のとおり発言があった。

- ・ ねぎは主要品目の一つであるが、温度管理が大変である。夏ねぎは、現在トンネル栽培を行っている。自然を相手に栽培するので、朝晩換気するといった温度管理に大変気を使う。また、5月から6月までの出荷分については価格的に採算がとれるが、7月や8月は暑いので消費が落ちるため価格が安くなる傾向にある。さらに、夏場は、高温に加え、雨が多いので、「軟腐」という病気が発生して収量が落ちることもあり、防除作業に苦労している。
- ・ レタスについては春と秋の二期作。できるかぎり減農薬での栽培を心がけているが、虫が入っていると消費者から苦情がある。検査は十分行っているが、一枚一枚葉の中を調べる訳にもいかず、苦慮している。本日は、消費者の方々にも生産の段階での苦労を少しでも解っていただけたらと思っている。
- ・ 西風が吹く時期が一番大変である。トンネルにかけたビニールが風で飛ばされてしまうので、毎日畑を駆け回っている。
- ・ ねぎ栽培は5月や6月は気候が安定していて栽培しやすいが、7月や8月は最近異常高温となっており、暑い時期の作付けが大変である。
- ・ 東北産に負けないようにと日々頑張っている。

(4) 以上を踏まえ、以下のような意見交換が行われた。

【茨城県地域女性団体連絡会】

- ・ ねぎを購入するときのコツは何か。またこれまで、白いものや長いものを選択して購入していたが、最近は青いものもよくスーパーの店頭で並んでいる。栄養面においては同じなのか。

【JA岩井】

- ・ ねぎを選ぶコツとしては、できるだけ白いものを選んでもらうのがよいが、青い葉の部分にはビタミンが多く、最近は白い部分を中心に食べるねぎと葉の部分を中心に食べるねぎの両方が出回っている。

ちなみにJA岩井管内で生産している「鍋ねぎ」という商品は、一本ねぎと下仁田ねぎを掛け合わせて作った鍋用に特化したねぎで、平成16年から生産しており、下仁田ねぎのおいしさと一本ねぎの白い部分の辛みをそれぞれいいとこ取りしたねぎである。

また、ねぎは購入してから常温のまま日数がたつと白い部分が青く変色するので、なるべく早く食べた方がよい。根に近い部分のほうが甘いので、部位によって使い方を工夫するとよい。

【(一社)全国トマト工業会】

- ・ 茨城県内でも加工用トマトを栽培してもらっているが、とてもねぎやレタスには及ばない量で、さらに生産者の高齢化もあり年々耕地面積が減ってきており、何とか歯止めをかけようと模索しているところ。
- ・ 茨城県内の総農家数や耕地面積も減少してきているとのことだが、主力のレタスやねぎについては収入が確保できると思うが、そうした中でも若い後継者が入ってこないのか。また、ねぎについては耕地面積の維持は可能なのか。
- ・ ねぎの収穫機が約250台導入されているとのことだが、ねぎ生産における機械化は全体の何パーセントか。また、機械化されていないところは手作業で収穫されているのか。

【JA岩井】

- ・ 加工用トマトの栽培については、JA岩井管内では1農家が昨年50a近く栽培しており、今後2倍近くに増やす予定。また、県西地区の別の農協でも栽培しているが、夏場の換金作物として、外国人実修生を雇用しながら規模を拡大していくという話を聞いている。
- ・ ねぎ生産の機械化率については、ねぎ生産農家約400名のうち250名が収穫機を導入しているので6割となるが、残り4割についてもトラクターに簡易式の収穫機を付けて収穫しており、手作業で収穫している人は少ない傾向になっている。
- ・ 後継者の確保は非常に難しいが、JA岩井では営農部を中心に向こう10年間のビジョンを作って、レタスやねぎの耕地面積維持に取り組ん

でいる。生産者数は減少傾向にあるが、外国人実習生を入れながら、耕地面積を維持しているところ。現在約70名、夏場はさらに10名程度追加で受け入れている。ねぎについては、まだ秋冬ねぎの面積を拡大できると考えている。

【茨城県地域女性団体連絡会】

- ・ 消費者自身もただ安ければいいとは考えていない。生産者の賃金に見合わないものは手に入らないと思っている。

【(財)消費科学センター】

- ・ ねぎを白くするために土をかけるのだろうが、どのような機械か。また、夏ねぎの販売促進のため簡単レシピを作っていると資料にあるが、夏ねぎのお薦めの食べ方を教えてほしい。

【JA岩井】

- ・ ねぎに土をかけるのには、歩行型の小さい耕耘機を使っている。通常植えてから収穫までに3回土をかける。
- ・ ねぎの簡単レシピは多く、インターネット等でも紹介されている。熱を通してよいし、刻んでも甘みがでるので、夏は刻んで、冬であれば熱を通して利用していただくのがお薦め。

【岩井農協園芸部】

- ・ 減農薬栽培については、春のトンネル栽培ではほとんど使用していない。買って頂く立場からすると原発の問題や農薬の問題等があるが、一年を通して安定的に供給するためには、農薬を使わないといけない時期がある。

【茨城県地域女性団体連絡会】

- ・ 売上のうち、経費の割合はどれくらいか。

【岩井農協園芸部】

- ・ レタスについては1箱当たり箱代や包装資材、農協手数料等で500円弱コストがかかる。1箱19玉入ったものが約2,000円で市場取引される。春ものはさらにビニール、マルチ等の資材費もあり、1箱約2,000円で売って、農家の手取りは約1,000円。ただし農家の人件費は経費に含まれていない。

【茨城県地域女性団体連絡会】

- ・ 消費者が本当に知りたいのは、生産にどれくらいコストがかかって、農家にどれだけ収入が入った上で、店頭に並んでいるかである。
- ・ 例えば、全国的に組織をもっているようなところで、きれいに包装しなくても、一か所にもってきたものを自分達で分けるということを女性達はできなくはない。そういうところと連携をとることが大事であると

考える。消費者は、生産者の顔が直接見え、安心して食べられることを望んでいる。ぜひ、そうしたシステムをJA岩井から立ち上げてもらえたら、出席して意見を言う意義もある。

【JA岩井】

- ・ レタスでは、一部、ラップをしないで冷蔵コンテナで輸送しているものもある。物流が難しいので、事業者に依頼してここまで取りにきてもらって、市場や集配センターに輸送している。

【茨城県地域女性団体連絡会】

- ・ ねぎを見せてもらったが皮をきれいに剥きすぎである。消費者はもう一皮剥かないと食べないので、結果として食べる量が少なくなる。生産者からすると出荷量が増えていいのかもしれないが、剥きすぎのような気がする。

【JA岩井】

- ・ 一部泥付きで生産している地域もあるが、ほぼ100%市場出荷なので、市場を通して量販店等の要望を聞いてこうした姿で出荷している。消費者から量販店側に要望していただくと変わっていくと思う。

【茨城県地域女性団体連絡会】

- ・ 我々は必ずしも量販店で購入することがいいとは思っていない。直接口に入るものでもあり、生産者と直接やりとりができるのが理想と思っている。JAとしては、これまで積み重ねてきたものもあり組織として変えるのは難しいかもしれないが、そうした仕組みが立ち上げられればすばらしいと思う。今の時代は、多少値段が高くてもそうした需要が多いので、生産者にも喜ばれると思う。

(5) 最後に、座長より、本日の意見交換会を踏まえ、現地の実情を野菜需給協議会の会員が把握し、これからの消費拡大に役立てていく旨の発言があり、閉会となった。